

明善寺郷土館

明善寺は、白河郷で最も重要な信仰の地のひとつで、1748年の創建以来、荻町にある仏教の聖地としても知られています。この地域の主要仏教宗派となっている浄土真宗の寺院、明善寺には、1827年に建てられた特徴的な茅葺きの本堂があり、本堂の隣には、この寺の住職やその家族の住居、庫裡があり、この村最大の合掌造りの家屋のひとつを占めています。1817年に建てられたこの建物は、白川郷の伝統生活を学ぶことができる郷土館となっています。

郷土館の建物は、この地域にはあまり観られない、木造よりも耐火性に優れた漆喰塗りの土壁造りです。その、広さ約330平方メートルの1階は、中央に囲炉裏のある大きな居間を中心とした居住空間となっており、暖炉の上には、火の粉を消したり、煙を消したり、家中の熱を逃がさないようにするための火天（ひあま）という木の板が掛けられています。居間は、家族が食事をしたり、囲炉裏を囲んで一家団欒のひとときを過ごしたりする場所で、家族は厳密に決められた席順に座っていました。家長は、家族の稼ぎ頭としての役割を象徴する中央の大黒柱に背を向けて座り、その右側には妻、左側には長男が座り、その他の家族は囲炉裏の反対側に座っていました。

主に養蚕に使われていた、2階にある4階建ての屋根裏部屋では、道具や台所用品、装飾品などを見学することができます。白川郷の人々の昔の暮らしぶりを知ることができます。また、屋根裏部屋では、マンサクの苗木で作られたネソという締め具と藁縄で固定された屋根の裏側を見ることもできます。妙善寺の庫裡のような合掌造りの家の基礎や1階は、大工が作るのが一般的でしたが、格子天井の上の部分は村人が協力して組み立てていました。

屋根裏の見学後は、庫裡から屋根付きの回廊を通過して、浄土真宗寺院特有の華やかな装飾が施された本堂に入ることができます。壁に描かれた富士山を中心とした山水画は、浜田泰輔画伯（1932-）の作品です。